中村元先生のこと

「勉め強いて」尽くした生涯

時間的—歴史的にも、空間的—風土的にも地球上のあらゆる「思想」について、はるか彼方から、ずっと足元の一点まで、資料となり得る文献などが伝わるすべて、全世界・全歴史にわたって、見聞がひろがり、視線がとどき、そこ・ここのいたるところに到達して、明晰な表現により理解し解説しようという、まさに思想研究者としてこれ以上ない壮大な志を抱きつつ、中村元先生は、能うかぎりの力を「勉め強いて」尽くし、しかもそれにほぼ叶う仕事をなしとげて、一九九九（平成十一）年十月十日、八十六歳の寿命を閉じられた。

いまから十三年まえになるが、先生にはほぼ自伝に近い『学問の開拓』（佼成出版社、一九八六年）の著書がある。あらためてこの書を読み返し、以下には敬称を省いて、先生の生涯をふりかえり、私の思いも添える。

先生は、一九一二（大正元）年十一月二十八日、島根県松江市の生まれ。翌年、父の勤めの関係で、東京の本郷西方町に移る。同地の誠之小学校（関東大震災に遭って五～六年生の一年間は大阪に移住、阿倍野橋近く常盤〈松〉小学校）に学び、つづいて東京高等師範付属中学に入る。

入学直後一日も登校せずに腎臓の病で一年間休学（先生の死因も腎不全であった。ただし「わたくしは体は弱くてすぐ風邪をひくが、おかげさまで持病はない」）。

一年遅れて中学に復帰。体操は見学ばかり、スポーツは全くせずに、興味もない。哲学書や宗教書を読みふけり、また世界史に関心を深める。中学四年終了で（旧制）第一高等学校文科乙類に入学。クラスの勉強組みリーダーとされ、すでに哲学（教師は岩本禎）の答案をドイツ語で記す。一高文乙はエリート・コースの最たるもの、東京帝大（東大）法学部に進むのが通例なのに、先生は、東大文学部印度哲学梵文学科に入学。宇井伯壽先生の秘蔵の弟子となり、和辻哲郎先生や渡辺楳雄博士に可愛がられる。

「西洋の哲学思想には何かしら冷たいものが感ぜられ…心の安らぎを与えてくれない。心の不安や煩悶を除いてくれるとは思わなかった。わたくしは、奥深いとともに温かさを感じさせるインドから仏教の哲学思想に魅きつけられた」

「目に見える現実の世界に…迷っているわれわれに、インドの思想は、形而上学的な深みから呼びかける」

東大の卒業論文は、ナーガールジュナ（龍樹）の『中論』の研究（それは後年に先生の著『ナーガールジュナ』（人類の知的遺産13、講談社、一九八〇年）となる）。

卒業直前に宇井先生より、インド哲学の正統で嫡流であるヴェーダーンタ哲学研究を奨められ、大学院修了の論文（同時に学位論文）として、あの大部の『初期ヴェーダーンタ哲学史』を完成する（先の大戦時に当たり、原稿用紙の入手にも苦労した）。

膨大な学位論文に恩師も「悲鳴」

『初期ヴェーダーンタ哲学史』

「論文は膨大な量になり、とても全部を一度に持つことはできなかった。仕方なく、弟に手伝ってもらい、手押し車で事務室まで運んだが、あとで、その分量を見た宇井先生は、思わず、『わあ、これは読むのが大変だ!』と、悲鳴をあげられた。先生に悲鳴をあげさせたのは、このとき、一度だけである」

第三回日中仏教学術会議で基調講演を行なう中村元博士（平成元年11月、東京・有楽町）

師友と親密に交わる

一高時代の級友との絆深く

筑波大学名誉教授

三枝　充悳

さいぐさ・みつよし氏＝一九二三年、静岡生まれ。東京大学、ミュンヘン大学に学び、国学院大学、筑波大学、日本大学の各教授を経て、現在、筑波大学名誉教授。文学博士。主な著書に『初期仏教の思想』『比較思想論』『仏教入門』など多数。中村元博士との共著に『バウッダ・佛教』がある。

それはのち岩波書店より全四冊として公刊され、日本学士院賞・恩賜賞を受ける。

一九四三年に東大助教授、一九五四年に同教授に就任、一九七三年に東大を停年退職するまでの三十年間にわたり、講義も演習もインド哲学に集注し、またインド史（とくにインド古代史）の（インドの古典語をふくむ諸言語およびギリシャ語の資料による）解明を果たす。

サンスクリット語の諸インド哲学書の邦訳、そして何よりもインド仏教（とりわけ原始仏教）を専門とする諸研究を続々と公刊、同時にパーリ語仏典からの平明な邦訳が読書人に広く迎えられる。

往時の比較哲学という呼称を比較思想にあらためたのも、先生であった。『東洋人の思惟方法』（二巻、のち四巻）につづいて、『比較思想論』を公刊し、比較思想研究の機運を高めた。

やがて比較思想学会が設立され、先生はその会長に就任。さらに『世界思想史』（古代、普遍、中世、近代の四思想を七巻に叙述）の金字塔を確立する。

三十余年を費やした『仏教語大辞典』が完成し、第一次の『中村元選集』（全二十三巻）の完結とがあい俟って、文化勲章を受章する。一九七七年、先生は六十四歳。

上述の自伝には『ダンマパダ』（法句経）の「ただ誹（そし）られるのみ、ただ褒められるのみ、かかるものは、かつてあらず、さきにもあらじ、いまもまたあるなし」の句を挿入している。先生の赫々たる業績のみを列挙し、人徳の顕彰ばかりとなりがちなこの拙文もやや控えなければなるまい。

先生はたとえば歌舞音曲のたぐいはいっさい遠い。文芸も映像演劇も縁がない。趣味や道楽もご存知ない。

「若いときから酒や煙草の楽しみを知らず、食べるほうでも、別に自然食主義者ではないが、肉類、生魚のたぐいは好みではなかった。人が趣味と呼ぶものも持ち合わさなかったし、老境に至っては、ただ、娘や孫たちのいる家に行き、そこで心おきなく居眠りすることが唯一の趣味らしい趣味にすぎない、という無粋者である。このような野暮夫」と記す先生は、実に師友に恵まれており、師友たちと親密に交わり尊敬、支援し合って生涯をすごした。とりわけ一高時代の級友との友情の深い絆（きずな）は驚嘆に値する。

◇以下は2面に続く◇

本日は、6～12面に中外図書室（読書週間特集②）

やすらぎのある生活（くらし）—浜屋の願いです。
浜屋は京阪神に安心のチェーン店網
ご寺院用お仏具・お仏壇の製造・販売
浜屋
本社　姫路市竜野町2丁目31番地　☎(0792)88-2211代
寺院営業部　西宮市山口町上山口2012-2　☎(078)903-2214代
浜屋へのお電話は通話料無料の　0120-1616-94（イロイロ　クヨー）

明るく謙虚で高ぶらず

「平和への道」掲げて　アヒンサーを説く

◇1面からの続き◇

「わたくしは…まさに流れるように生きてきたという感が深い。わたくしは、例えば、親の死とかの不幸な事件に遭遇して、その懊悩の果てにインドの思想、あるいは仏教の思想に傾いていったのではないようである。このような道に入ったのは、人々との出会いに、なによりも影響されたからであろう」

洛子夫人のかねてよりの述懐によれば、先生の「遊ぶ」は「勉強、研究、執筆」であり、なるほどそれが先生の「好きなこと」であった。

それにしても、先生は実にマメな人であった。勤勉であり、同時に、かなり大胆、積極的であり、実行力をそなえていた。

「学問の思い出」（『東方学』90、一九九四年。この小冊子は六日の先生の本葬の参加者全員に配布される）において、先生は、

「学者としては、これは僭越ですけれども、私は鼻っ柱が強いので、ほかの人が何と言おうと、自分のやる道を進めようと思いました」

とみずから仰言っているように、独創をモットーとし、独自の研究の方法と資料探索を進めて、独特の、かつ膨大な成果を完遂した。

そのなかにつぎの二点の英文の著書がある。一つは『現代サンスクリット語入門』（A Companion to Contemporary Sanskrit、このなかには「原子爆弾」などの現代語のサンスクリット語ももちろんふくまれる）、他には『日本思想展開史』（A History of the Development of Japanese Thought、このなかではたとえば鈴木正三なども解説される）。（英語ほか外国語の著述も数十点に及ぶ）

意欲のある人に学問を開放

東大退官以前、自身が得られた印税収入などを原資として開設された㈶東方研究会は、多くの大学院修了後の若い研究者の養成機関として機能する。

さらに先生は退官後、同会の事業の一つとして東方学院を創設して（寺子屋と謙遜しながら）、年齢や前歴などのいっさいを問わず、学びたい意欲のある人々すべてに学問を開放し、東洋思想・仏教・インドの諸語学のコースの広い領域にわたる諸講座をセットする。

毎年、老若男女の延べ約二百余人（研究会員と称する）がこの東方学院に学び、長期にわたる愛講者も少なくない。

その歴史はすでに二十五年をこえ、その間に分校が関西に、名古屋に開かれて久しい。

先生は、NHKの「宗教の時間」ほか数々の番組に、しかも長期にわたり出演し、平易に仏教のあれこれを、宗教を、人生を語り、温和なその慈顔は視聴者になじみ深い。

先生は明るく、穏やかに、懇ろに、謙虚で高ぶらず、惜しみなく、節度をもって、人々に語り、自伝では、「平和への道」を掲げて、アヒンサー（不傷害）を説き、世界共同体を称え、「小宇宙即大宇宙」を論じている。

『中村元選集〈決定版〉』の全三十二巻・別巻八巻という一大出版を完了したすぐあと、先生は逝き、ただただ呆然たる私たちがあとに残されている。